



川野健さん

(豊岡)

今回は、茨城大学教育学部英語学科に在籍する川野健さん(22歳)の登場です。

両親が学校の先生という家庭で育ち、子どもが好きという健さんは現在、小学校の先生になることを目指して勉強中とのこと。小学4年生から高校3年生までは、部活動を通して3道を続けてきたことで、「高校時代は同じ部員の2倍くらい練習しました。静かな中、一本一本真剣に弓を射ることで、集中力が備わり、物事を最後までやり遂げる根気も身に付きました」と話します。

そんな健さんは、一方で「自然を楽しむことにも夢中だとか。天体望遠鏡で星や月を観察したり、自宅の庭で自ら栽培するミニトマトやカブの成長を楽しみに見守っていたりしています」。

このように子どもと自然が好き、という健さん。「これからは自分と違う世代の人や外国人ともかかわりを持ってさまざまなことを吸収し、自分の人生の糧としていきたいです」と穏やかな笑顔で話してくれました。



ふるさと歴訪  
歴史を再発見

# 村松山虚空蔵堂

村松山虚空蔵堂住職

原 淑行

村松山は、日高寺や日光寺とも呼ばれ、常陸五山など山岳信仰との結び付きが深い寺院として平安時代に創建されています。また、その七堂伽藍の置かれた位置は、那珂郡と久慈郡の境界付近にあり、太平洋と2つの内海(阿漕ヶ浦、真崎浦)を結ぶ要衝の地にあります。このことから、地域の領主層にとっても当地域を支配する上で重要な場所であり、近くには城館が築かれ、時に戦場と化し、文明17年(1485年)にも虚空蔵堂は戦禍を被っています。

このような政治的に重要な拠点としての位置付けとは相反して、村松山は周辺の豊かな水辺環境と人々の営みが織り成す景観を宝に、虚空蔵の信仰と結び付き、人々の心を癒やし、安らぎと至福のひとつときを提供してきたのです。大海と内海との漁業や製塩業、そして海上交通の中継地点としての役割を担いながら、経済活動と結び付いた篤い信仰が築かれ、多くの人々を引き付けてきたのです。江戸時代に松尾芭蕉の仏頂禪師を訪ねた旅の記録「鹿島詣」発表以後、江戸に近い鹿島神宮が三社巡り観光で隆盛を見ましたが、村松山は、それ以前の中世から旅の目的地の一つとして周知されていたのです。戦国時代に活躍した恵範上人が、2つの内海のどちらかを指して中国杭州の「西湖」に準えており、「旅人の夢を

洗う(二)村松虚空蔵堂  
勸進疏」と記録しているのもその一例です。

水戸黄門こと水戸藩第二代藩主・徳川光

圀も当地を訪れ「村松の梢に波の音をひて夜半の嵐に夢も結ばず」の歌を詠んでいます。水戸八景「村松の晴嵐」の誕生の契機となった歌かもしれません。原南陽の実弟である水戸藩郡奉行雨宮瑞亭が文化

年間に著した「美ち艸」には、「虚空蔵」、「マサキ」、「アコキ」、「下手川」のほか村松村が地引場であることが太平洋側から眺望した絵として紹介されています。

また、他藩から水戸常陸方面を旅した多くの文人や志士たちも村松山を訪れています。その一人、二本松藩の成田確斎も文政6年(1823年)3月6日(「南輪紀遊」)に、虚空蔵堂をお参りしています。

村松山は、名勝の地として明治以降も地域振興のため観光誘客に努めてきましたが、内海の干拓農地化や周辺の大規模開発により景観を楽しむ機会が極端に減少してしまいました。下手川河口付近、松林や砂浜を散策路として整備し、伝統ある東海村の優れた景勝地を保護活用するよう、市民の力により推進できることを願ってやみません。

